

平成 29 年度第 2 回香美市ものづくり会議
議事録（要約）

日時；平成 29 年 11 月 27 日（月）14：00～15：55

場所；香美市役所 3 階会議室 2

出席者

委員；〔高知工科大学地域連携機構副機構長〕浜田正彦、〔香美市商工会長〕寺村勉、〔香美市観光協会会長〕依光陽一郎、〔JA 土佐香美土佐山田支所長〕北岡修、〔香美森林組合代表理事組合長〕野島常稔、〔高知工科大学地域連携機構客員研究員〕村井亮介、〔山田高等学校長〕濱田久美子、〔NPO 法人いなかみ〕近藤純次、〔株土佐山田ショッピングセンター代表取締役社長〕石川靖、〔高知県地域産業振興監〕前田和彦

香美市；〔市長〕法光院晶一、〔副市長〕今田博明、〔教育長〕時久恵子、〔企画財政課長〕川田学、〔産業振興課長〕西本恭久、〔産業振興課班長〕小松幸春、〔産業振興課班長〕日和佐干城、〔産業振興課班長〕中川英斉、〔産業振興課〕明石祐樹、〔定住推進課長〕中山繁美、〔定住推進課班長〕松本理砂、〔定住推進課〕小松直人
(敬称略)

1. 開会（中山）

2. 会長挨拶（浜田）

国会で、まち・人・仕事のことが取り上げられているが、ものづくり会議は、人づくりもあるが、仕事の部分を承っていると思う。雇用、人の減少、伝統産業の衰退について、地域課題や地域の良さを今後活かしていかなければならない。地域の良さである伝統工芸の打ち刃物をどうしていくか、人づくりをどうしていくかについて 3 回分科会を行った。

今後も、地域課題や良さを活かすための施策づくりのために、分科会方式としていきたい。

3. 議事

(1) 分科会の報告について

小松；資料に沿って報告

西本；補足説明

建設場所は、県と市で土佐山田町大平の林業試験場の県有地を候補地としているが、都市計画の関係で、市がこういった施設を建てられるか確認中。建物自体は

都市計画区域内への建設は可能であるがようだが、協議により新たな土地を探すとなると、都市計画区域内であれば、開発計画からマスタープラン策定など1年近くの期間がかかるかもしれない。

林業試験場地に建てられなければ、計画通りに早く進めるとなると、都市計画区域外の香北や逆川などを検討することになると考える。

浜田会長；

分科会では、鍛冶屋は「後継者育成＝学校」であるが、学校に入ってくる人が単なる働き手ではなく、将来像の描けるものでないと、行政の説明責任の問題もでてくる。そうしたところで一步踏み込んだものにさせていただいた。その結果、学校のコンセプトが作られ、前向きに進めていくこととなった。

鍛冶屋からすると、学校が人材育成の手段になってくる可能性もあるため、その先に見える伝統工芸としての課題にも取り組めるものにしていかなければならない。

一時は県・市・組合で事務的などころを進め、その後、分科会を開きたい。

大平に建てるかどうかはいつごろの判断になるか？

前田；

県では林業学校の将来構想との兼ね合いや賃料などで話を進めている。

細かなところはまだ先になるが、大まかなところは年内を目途としたい。

副市長；

基本計画は建物についてか、ソフトを含めたものか？

西本；

建物・ソフトを含めたものである。

事業費が1億6千万円と大きいのが、そこまでの規模が必要か。林業大学の隣に建設できれば、座学については施設を借りられることができないかという思いもある。そうならば、組合の構想ほど大きな施設の必要もないのでは考える。

建築場所が決定すれば、ソフト・ハードともに基本計画を策定していく。

前田；

市として土佐打ち刃物に対してどのように取り組むのか。工科大や林業学校との連携、PR、移住政策との組み合わせ、卒業後のフォローなど、ソフト部分の仕組みが建設前に必要である。組合中心の話になってくるが、構想が必要。3月末までに構想を整理していかなければならない。なぜ県の予算を使うのかの説明も必要になる。

寺村副会長；

刃物業界と市の思いが一つになった基本構想が必要。

現状の創設プランでは、途中で頓挫する心配がある。香美市として伝統産業を残していくという意思が必要。これに共感する市民、産業として残す鍛冶屋業界、ブランディング・市場開拓などが計画で見えてこなければならぬ。

市長；

計画は市が策定しなければならないが、中身は刃物業界の考えがしっかりと入っていないなければならない。組合にも専従的に取り組んでもらわないとできないと思う。刃物組合にも片手間ではできないという認識を持ってもらいたい。行政側も現状の体制では難しいので、組織再編し、商工観光の独立を考えている。国にも人材派遣をお願いし、また、高松の経済産業省にも伺い、鍛冶屋の学校の計画や観光の話をし、人材の依頼をしている。代替人事や予算など、行政にも負担があるが、こちらも体制整備に取り組んでいるので、刃物業界にも思いを伝え、失敗なくしっかりとやっていきたい。

経済産業省は、刃物については海外に打って出る商品と考えている。香美市で鍛造に関わる人材を育て、前を切り開いていきたい。刃物の需要が伸びており、人が必要な状況であり、育てた人の雇用・就業までしっかりしていきたい。

野島；

学校には賛成である。

現在、林業は機械化が進んでいるが、鉋などの刃物を持たすようにしている。また、研ぐ技術を知らない者もいる。

林業学校の卒業生が3~4人いるが、刃物の研ぎ方や使い方など、林業学校との連携をしっかりとしてもらいたい。

北岡；

鍛冶屋の学校への生徒は、どのように集めるのか？ 確実に入ってくるのか？

浜田；

広報しながらになるが、一般に鍛冶屋を目指す人が主になると思う。

市長；

企業にも一歩踏み出してもらい、「雇用したので2年間学校で修行させる」ぐらいの気持ちを持ってもらいたい。

どこへ情報発信していくかが非常に大事になる。国が色々な方法を持っているので、ノウハウを活かしていきたい。

野島；

ヨーロッパの機械を購入した際に、オーストリアとドイツの森林官を招いたが、高知に素晴らしい刃物があることを知っていた。

濱田校長；

山田高校にもモンゴルから先生が来ていたが、猟用のナイフを買っていった。モンゴルでも日本の刃物が素晴らしいことが伝わっている。

依光；

鍛冶屋の学校の理念が「地域産業」となっているが、「地場産業」に変えてもらいたい。地場産業は地域で生産して全国販売するもので、地域産業は地域で生産して地域で販売するもの。商工会の工業部でも地場産業として捉えてきた。

石川；

市場規模が大きくなるとの話であったが、人をつくっても企業は景気や業績に左右されるので、採用が突如できなくなることもあり得る。学校の卒業生の雇用にはリスクが伴うので、常に点検しながら進めていかなければならない。

浜田会長；

土佐打ち刃物が一般の企業ではなく、香美市の伝統産業として培った歴史があり、これを守っていくこと、また、そこに伸びしろがある。販売力が必要であり、その目は外国だと思う。これをまわしていける人材が別の形で必要になる。

刃物組合もマーケティングまでは述べていなかったが、自分で会計ができるなど、マネージメントできる人材を目標にしていると思う。

市長；

ものをつくることも大事だが、マーケティング力やデザイン力もつけないといけないし、柄や鞘、ステンレスとのコラボなど裾野の広がりも考えていかなければならない。今までの徒弟関係でできなかったことが課題になってくる。

(2) 今後の取り組みについて

浜田会長；

ものづくり会議は仕事づくりが主になる。

フラフも香美市の伝統産業として位置付けされているので、フラフに関する分科会を立ち上げたいと思っている。

他に林業に関する分科会と人材育成を考えている。

今後新しい時代を切り開ける人材として、多くは外から呼びこんで活性化させようとしている。外国と販売する際に、人材がいなければ前に進まない。こうした人材育成が必要になると思う。

依光；

外国語ができる人の活躍の場が欲しいと思う。

香美市は農業と食品工業も可能性がある。

石川；

県外のスーパーマーケットでは、高知フェアが多いが、香美市は、1次産品はあるが加工品が無いので、浅野・坂田の生姜に続く品を作って欲しい。

1次産品としては四万十と仁淀がブランドとして名前が挙がるが、「物部」がでてこない。「物部」を誇れるブランドとして価値を高めていきたい。

2次産品では、味噌・醤油・お酢といった基礎調味料が高知県は脆弱で、県外から入ってきている。小規模でよいので、これらを作れる人が事業を展開できればありがたい。

いなかみから紹介のあった移住者がクラフトビールを作っている(6k1)が、瞬く間に販売の目論見ができた。小規模な食品のものづくりを「物部」という名前を使い、香

美市から全国発信できないかと考えている。

市長；

高知県は食料を生産している所であるが、加工部門が弱く、食品にはお金を費やしている。

香美市では、ここ 2 年ほどでジェトロと関わっていこうとする企業が増えてきている。市もジェトロと連携して、海外へ出て行く状況をつくっていかねばと考えている。

村井；

香美市から出ていっているものが多いと分かっているならば、そこを香美市へ誘致することができればと思う。

北岡；

JA の立場では、加工が弱いことは痛感しているが、加工に対応できる作物も少ない。加工を検討した時期もあったかと思うが、加工には至らず、設備投資もできていない。

前田；

幡多地域も、加工を始めたのがここ 10 年である。産業振興計画により付加価値を付けていくということで、各市町村が加工事業に取り組んだ。各市町村が 6 次化に向けた研究会を立ち上げ、小規模開発を始めた。

香美市も資源があり商品もあるが、売り方が十分でないので、仕組みを作れば、仕掛け方はあると思う。

濱田校長；

先日、リーサスで発表する場があり、生徒がジビエの発表をした。

狩猟から加工・販売により 12 億円稼げるというものであったが、こういった発想も面白い。

石川；

ジビエの加工には食品衛生責任者の資格が必要で、この資格が難しい。今は大豊町の猪鹿工房の独占状態である。香美市は、解体はできるが加工ができない。加工できる人が移住してくれれば、香美市でものづくりができる。

市長；

ジビエでも、鹿と猪だけでは限界がある。多品種が必要。

村井；

広い枠組みで、「香美市でこういうことができれば良いな」と「こういうことをやりたい人」がマッチングできる仕組みがあればと思う。

濱田校長；

「最後の清流四万十」、「仁淀ブルー」に続く物部川流域のブランド化ができれば、地域に住む人の誇りになる。

浜田会長；

「物部」という言葉を広げ、人を呼び込む形になればありがたい。

物部ブランドの中に、農業や食品加工など資源を活用してものを作り上げていくことがあっても良い。分科会として関係者を呼んで話ができる場ができればと思う。

教育長；

物部地域では、子どもたちに外国に発信できる力をつけてもらう教育を考えている。また、物部のコミュニティースクールでは、小中学校での起業教育ができないかとの話をしている。子どもたちの発想を地域が応援し、何か商品ができれば、仕事や開発の面白さに気付いていく。

課題を乗り越えるために煽ってくれる人がいれば、子ども・大人・地域が一緒になり、そこから物部ブランドが生まれそうに思う。

市長；

小学校から大学までしっかりとつながり、子どもたちの育つラインをつくっていかなければならない。まちをあげて地元の学校を応援していく環境をつくることを、ものづくり会議で決意してもらいたい。

ものづくりの基礎である人づくりに向け、山田高校には小中学校・大学と連携した探求の学校になってもらいたい。

近藤；

まとめて決定していく場に、エンドユーザーの姿が見えていない。

職人とエンドユーザーをつなぐのはデザイナーであると思う。分科会の中に、デザイナーを中心としたエンドユーザーと既存の産業を結ぶ場があれば良いと思う。

浜田会長；

これからはデザインが勝敗を分ける時代になると思う。どういった地域のデザインを描けるか、その人材で方向性が決まってくる。まちに魅力ができれば、人材も入ってくると思う。

市長；

フラフを活用して小物まで作れると思う。3工場が近くにあるので、フラフを掲げるだけでなく、ショーウィンドウを構え、フラフから派生した女性の喜ぶ商品を置いてもらいたい。

物部川のそばでフラフ通りのようなものができれば、良い空間になると思う。フラフ文化をまちの中に広げていけるようにしたい。

浜田；

天童市がふるさと納税のお礼品として、将棋の駒の裏に納税者の名前を彫ったキーホルダーをプレゼントしており、効果も大きい。

フラフで何か作り、名前を入れたものを、香美市からのプレゼント（返礼品ではなく）として、まちのイメージアップにしていきたい。

中山；

ふるさと納税で、小さいフラフがでてくる。小物も考えてくれており、今後は体験コ

ースも検討していく。

分科会の立ち上げ

- ・ 農業・食品・物部ブランド
石川（座長）、依光、村井、北岡、前田
- ・ フラフ
吉村（座長）、近藤、村井、濱田、前田（アドバイザー）

(3) その他

野島；

人材が今後の林業を左右する。農業も含め、市政として人材育成に取り組んでもらいたい。

近藤；

お試し住宅に刃物に取り組みたい人が来ており、流通センターにも相談しているが、市内には修行の受入先が無い。今後、鍛冶屋の学校の設立や後継者育成に取り組むときに、今来ている人が、修行先が無く、どこかへ行ってしまうのは残念である。現時点で何かできることを模索しているが、アドバイスがあれば教えてもらいたい。

→寺村副会長と個別に対応

前田；

鍛冶屋の学校の分科会は行うのか？

浜田会長；

今は事務的なところを進めており、ソフト部分を詰めていきながら、状況を見て分科会を開催する。

市長；

行政は起業支援の制度も整理していかなければならない。

刃物業界は、後継者ができたときの詰めをしっかりとし、無責任な結果にならないよう、カリキュラムを含め、責任を覚悟してもらいたい。

5. 閉会

次回；2月開催予定